

平成21年 6月15日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520405  
 研究課題名（和文） 戦後日本人のコミュニケーション行動の変容に関する実証的研究  
 研究課題名（英文） Proof-based Research on the Change of Japanese Communication Behavior after World War II  
 研究代表者  
 陣内 正敬（JINNOUCHI MASATAKA）  
 関西学院大学・総合政策学部・教授  
 研究者番号：70154424

研究成果の概要：戦後における日本人のコミュニケーション行動の変化を探るため、スポーツ場面での言語行動に焦点を絞り、そこでの変化の様子やその要因を考察した。具体的には、毎年甲子園で行われる高校野球の選手宣誓行動を映像資料によって跡付け、その宣誓文や宣誓行動におけるパラ言語(声の調子など)の側面などについて、考察した。その結果、1980年代を境に、型通りのものから多様なものへと変化していることが判明した。これは、日本社会の変容（モダンからポストモダンへ、あるいは戦後社会からポスト戦後社会へ）と連動した現象である、と結論づけた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本人 コミュニケーション 高校野球 選手宣誓 型 自己表現

## 1. 研究開始当初の背景

日本人のコミュニケーションの変容と言う大きなテーマに対して、実証的データからそのことを検討するために、スポーツの世界にみられる言動、その中でも、とくに高校野球の選手宣誓を中心に資料を収集し、議論の

基盤を得ようと考えた。毎年甲子園球場で行われる選手宣誓はおよそ80年の歴史を持ち、その歴史性、継続性、あるいは宣誓者の属性、宣誓場面などを考え合わせると、きわめて均質の貴重な資料と言わざるを得ない。また、音声や映像として保存されているものも多

いことを考えると、コミュニケーション行動の研究にとって、魅力的なデータなのである。そして、宣誓文や宣誓行動に現れる時代による変化は、その時々日本人の心理やその背景をなす日本社会のあり方を映すものと思われる。日本人のコミュニケーションの変容を語るには、どのようなデータによるものなのかが最も重要なことであるが、高校野球の選手宣誓は、その意味できわめて貴重な資料と判断できる。

## 2. 研究の目的

戦後日本社会の変容とともに日本人のものの考え方も変わってきた。その中でもとりわけ特徴的なことは、規範意識（わきまえ意識、型意識）の衰退と、逆に多様性や個性を重んじる価値観の拡大であろう。この要因としては、戦後において個人の尊重や民主平等思想、そしてこれが当時の子供たちにも教育されてきたこと（思想・教育的要因）がまず挙げられる。これによって従来の儒教倫理観は衰退し、目上目下や男女間にあった礼儀や区分け意識、また場面を意識した遠慮などから生じる言語行動は希薄になってきた。

これに加え、1970年代以降の大衆消費社会の出現という社会的要因も日本人の言語観変容に大きく作用した。物質的豊かさが実現した社会に生きる人間の目標は、個人の自己実現である。そこには個性や多様性が求められる。これが、脱画一的な言語観やコミュニケーション意識を育てる土壌となったことは間違いない。また消費・余暇社会は自由で楽しい自己表現をよしとする。

このように、フラット化と自己表現を志向する流れの中で、ことばやコミュニケーション面においても同様のことが観察されている。タメ口（目上に対する場面や改まった場面でも仲間内言葉を使うこと）化はその象徴

である。これは、これまで敬語などで表現されてきた人間関係が従来とは違うものとして捉えられていることを意味する。親と子、兄弟姉妹、教師と生徒、先輩と後輩などにおいて相互に使われる言葉も以前と比較するとずいぶんと多様化し、必ずしも敬語は使われない。これは関係がフラット化してきたことの表れであり、そこでは、自分をどう主張し、どう表現するかという自己裁量が重要性を増している。

またノンバーバルな面に視点を移してみると、例えば高校野球でホームランを打った打者がいわゆるガッツポーズをしてダイヤモンドを1周するということがある時期から始まったが、これは本人の感情を素直に表しているという点で、それまでのワキマエ意識を破るものであった。また、最近では国技である相撲の世界でも、外国人力士ゆえであろうか、勝者が小さくガッツポーズをする場面も見られる。つい最近では、優勝を決めた瞬間に両手挙手のガッツポーズをしたことが物議を醸した。

以上のような日本人の言語行動、コミュニケーション行動における変容はいつ頃、なぜ起きたのか。そしてそれは今後どうなるのかを探ることが本研究の目的である。ごく最近では、多様化に対する一種の揺れ戻し現象と思われることも生じている。これらも加味しながら、21世紀に生きる日本人の言語行動やコミュニケーション意識を予測する。

## 3. 研究の方法

以上のことを明らかにするために、以下のような3種類の調査を行う。

### (1) 観察データ収集

テキストデータとして、全国高校野球の選

手宣誓文を過去に遡って調査し、定型的な文章がいつごろどのように個性的なものに変わっていったか検討する。あるいは、スポーツ大会（オリンピックなど）に出場する選手のインタビューを調べ、その受け答えにどのような変化があるのかを跡付ける。また、ノンバーバルなデータとして、競技中あるいはそれ以外の行動や表情を時代的に比較してみる。仮説として、おそらく70年代から80年代を境に、建前やわきまえから徐々に本音や自由な自己表現が増してくるものと期待される。

#### （2）アンケート・データ収集

（1）で得られた観察データや、それ以外の言語行動事象に関して、その変化を日本人がどのように受け止めているかをアンケートによって調査する。これには、敬語の規範意識、呼びかけ語のファーストネーム化に関することなど、わきまえや礼儀に関わる言語観、コミュニケーション観のどこがどのように変化してきているかを明らかにする。調査対象は、文化の発信地であり、全国に影響力を持つ首都圏と関西圏の若年世代、年配世代とする。なお、調査票の作成には、「国語に関する世論調査」（文化庁）や「現代日本人の意識構造」（NHK放送文化研究所）などを参考にする。

#### （3）言説データ収集

日本人の言語観やコミュニケーション意識の変容について、これまでどのようなものが論じられてきたかを検索し、それを整理する。そして、そこにどのような特徴があるのかを抽出するという、一種のメタ研究といえるものである。この言説研究は、上記（1）と（2）の研究をより相対化し、客観化する意味を持ち、また当時の世論を知る手掛かり

でもある。

#### 4. 研究成果

以上の研究の結果、「1980年代仮説…甲子園の高校野球大会における選手宣誓に「語り調」が出現するのは1980年代からであり、これは「自己表現」志向が発言したものである」を立てるに至った。

1980年代とはどういう時代であったか。それは明治期から始まった近代化路線が終わった時期であり、それ以降の日本社会はポスト近代と呼ばれ、個性、多様性、自己実現、自己表現などが価値を持つようになった社会である。「型」や「わきまえ」から「個性」や「逸脱」が許され、評価されるようになった。これらが若者のスポーツ言語行動の変化に影響を与えている。

甲子園でのこのような変化は、地方の高校野球大会にも影響を与え、やはり1980年代から多様な宣誓行動が出ている。たとえば1980年夏の地方大会と1985年のそれとを全国の地方紙における報道記事から整理すると、前者では型どおりの記事であるのに対し、後者では多様な宣誓文に対して、それぞれにコメントを付した、多様な記事が多くなる。また、選手宣誓を行ったかつての選手に対するインタビューによっても、1980年代は選手たちの心情が変わっていた。

以上、まとめていけば、戦後社会からポスト戦後社会への変化と連動した宣誓行動の変化は、「型から自己表現へ」「競争から共生へ」「勝負からドラマへ」「抑制から解放へ」などと、特徴づけることができる。

本研究の特徴は、これまであまりともに扱われてこなかった日本人の言語観やコミュニケーション意識の変容に焦点を当てたことである。日本文化論の変容については様々な研究がなされてきたが（「日本文化論

の変容」(青木保)、「日本文化と個人主義」(山崎正和)を初め多数)、言語学、コミュニケーション論からのアプローチは少ない。この点において、日本文化の重要な要素として、また日本人の意識変容の在り方を探る重要な側面として、言語意識やコミュニケーション観の変容を明らかにし、その要因を探ることができたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1 陣内正敬、スポーツと言語行動・言語文化、月刊言語、査読無し、37-12、2008、8-9

2 陣内正敬、『敬語の指針』についての補足・解説、日本語学、査読無し、27-7、2008 28-37

3 陣内正敬、言語行動としての高校野球・選手宣誓—スポーツ言語文化論の事例研究—、語学教育フォーラム、査読無し、16、2008 339-355

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

陣内 正敬 (JINNOUCHI MASATAKA)  
関西学院大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：70154424

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし